

「書写」から「書道」へ、中高連携にむけての一試案

—学校段階間の円滑な接続を図るために—

From "penmanship" to "calligraphy," it is one tentative plan for the cooperation of a junior high school and the high school

— To plan the smooth connection between school stages—

松岡 千賀子*

MATSUOKA Chikako

1 はじめに

中央教育審議会（2008）の施策に「6-3-3-4制の弾力化に関し、小中一貫教育やいわゆる飛び級を含め、幼児教育と小学校との連携など、各学校段階間の円滑な連携・接続等のための取組について検討する。」とあるように、現在、学校間の連携・接続が課題とされている。公立の中高一貫校も増設されるなど、この問題は中学・高等学校間でも検討を要する課題である。

しかし実際には、書写（小学校・中学校）から書道（高等学校）への移行は課題も多く、円滑に連携されているとは言い難い。本稿では、そうした接続に伴う問題点を掲げ、その解決のための一試案を、書道に対する苦手意識の軽減・能動的な授業への取り組みについて実践報告も交えて提示する。

2 書写・書道教育の問題点

2-1 高等学校における学習指導要領（2010）の改善点

高等学校における学習指導要領（2010）では、芸術（書道）では、改善の基本として、芸術科（書道）については、その課題を踏まえ、中学校国語科の書写との関連を考慮し、書の文化の継承と創造への関心を一層高めるために、書の文化に関する学習の充実を図るとともに、豊かな情操を養い、感性や想像力を働かせながら考えたり判断したりするなどの資質や能力の育成を図るようにする。

という方針を掲げ、改善の具体的事項については、

中学校国語科の書写の学習との円滑な接続を図りながら、生徒の個性を生かした創造的な活動を行い、生涯にわたって書を愛好する心情を育て、芸術としての書を理解し、書の文化についての理解を一層深め尊重する態度を養うことを重視して、（以下略）

と記している。この点を踏まえ、現在の教育現場においてどのような取り組みがなされ、問題点が生じているかを、以下確認してみたい。

* 学習院大学教職課程非常勤講師

2-2 教科における位置づけの問題点

高等学校で芸術に関する科目として、音楽・美術・書道がある。一般的には、これらを並立させて芸術科とし、1種類を必修選択としている学校が多い。(学校によっては、教科担当者のいる科目だけを成立させ、その中から選択させている場合もある。)

これらの内、音楽・美術は小中学校においても同じ名前の科目が存在する。従って生徒も、大きな変化を感じることなく、比較的スムーズに高等学校の授業に取り組むことができている。

これに対し、書道という科目は小中学校にはない。いや、自分の学校にはあった、という人もいるかもしれないが、それは「書写」の間違いである。書道も書写も同じではないか、と思う人もいるかもしれないが、実はこれが大きく違う。意外と意識されていないことであるが、第一に教科が異なる。書道は「芸術科」、書写は「国語」に属する科目である。従って担当者も、中学生を相手にしている時には「国語の教員」、高校生を相手にしている時には「芸術科の教員」という、少々複雑な位置づけとなっているのである。

それでは学習内容はどのように違うのかというと、(書道では篆刻・刻字なども加わるものの)主に、紙に筆で字を書く、という点は同じである。楷書・行書は中学校でも高等学校でも扱うため、書く文字も一見類似しているように見える。しかし、指導方法や教育方針は大きく異なっている場合が多い。そしてこの違いが中学生の書写嫌いを生み、高校生を戸惑わせる原因となっている。以下、それぞれの学校における教育の違いを掲げ、その溝を埋める教育方法について検討してみることにする。

2-3 書き順から生じる問題点

現在小中学校で教えられている漢字の書き順は、1958年に当時の文部省が『筆順指導の手びき』に記したものである。その中には、

漢字の筆順の現状についてみると、書家の間においても行われるものについても、通俗的に一般社会に行われているものについても、同一文字に2種あるいは3種の筆順が行われている。特に楷書体の筆順について問題が多い。このような現状から見て、今後教育における漢字指導の能率を高め、児童生徒が混乱なく漢字を習得するのに便ならしめるために、教育漢字についての筆順を、出来るだけ統一する目的を以て本書を作成した。本書においては、とりあえず楷書体の筆順のみを掲げたが、楷書体の筆順がわかれば、行書体についても、おのずとそれが応用され得ると思われる。

と記され、

本書に示される筆順は、学習指導上に混乱を来たさないようにとの配慮から定められたものであって、そのことは、ここに取り上げなかった筆順についても、これを誤りとするものでもなく、また否定しようとするものでもない。

との一文も添えられている。

つまり、あくまでも「できるだけ統一する」のが目的であり、他の筆順を「誤りとするもの」ではないのである。

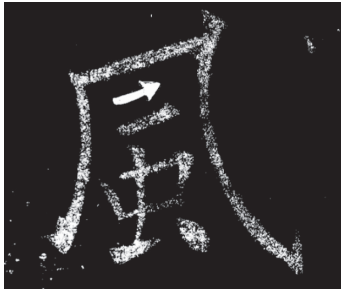
しかし実際の学校教育では、筆順は重視される場合が多く、生徒もかなり神経質になっている。勿論、でたらめな書き順は字形を崩す基となるため、なんでもよい、というわけにはいかない。しかし、現在の学校教育では、時には許容されている書き順も否定され、必要以上に厳守されていると聞く。それは書写の授業においても通じる傾向があり、生徒は筆遣いよりもまず書き順と字形にこだわる。その結果、書道との連携に支障を来す場合

も少なくない。以下に、教科書によく採用される文字を掲げ、確認してみたい。

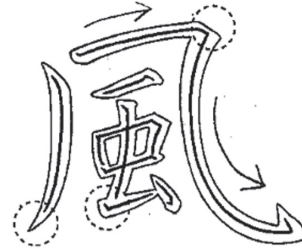
例「風」

次のA～Dの「風」は、高等学校の書道の教科書に頻用される中国の古典からの集字である。いずれも、風の字の三画目を左から右へ、漢数字の「一」の字のように書いていることが確認できる。(図版中の「矢印」(Eを除く)は筆者)

A 九成宮醴泉銘 (楷書)



B 孔子廟堂碑 (楷書)



C 蘭亭序 (行書)

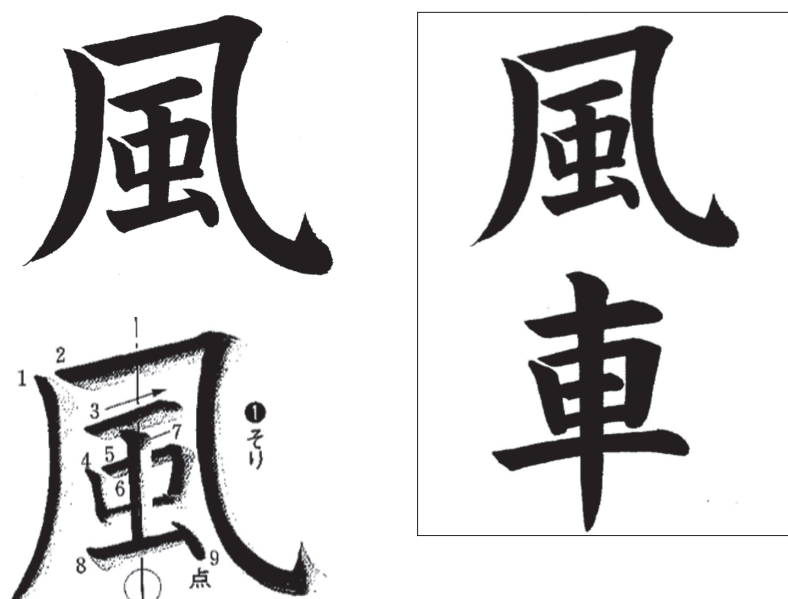
D 風信帖 (行書)



これに対し、小学校の国語では右上から左下に払うように(カタカナの「ノ」の字のように)指導される(右図参照)。下の「風」を見ると、Eの風の三画目は既掲の中国の古典と同様、「一」の向きで書かれている。一方、三省堂の「風の音を聞く」(行書)の「風」は「ノ」の向きで書かれている。勿論、どちらの書き方も可である。しかし、中学校の書写の授業で、あまりにも一通りの書き順に固執すると、先に掲げた古典の例からも分かるように、高等学校の書道の授業で大きなギャップを感じることになりかねない。



E 教育出版『中学書写』⁽¹⁾



教育出版の『中学書写』では、手本（左）の他、「→」を用いて書き順と運筆の方向も示している（右）。国語の授業で一般的に扱われる標準的な書き順と異なる場合も、このような方法で中学の段階から指導していくことによって、書道への接続がしやすくなるものと考えられる。

F 三省堂『中学生の書写』⁽²⁾



一方、三省堂の『中学生の書写』では、「ノ」の書き方を用いている。これは一般的な国語の指導の延長上にあるものである。①書き順は一通りではない、という前提を生かし、高等学校での書道への接続を重視するか、②正しい字形の意識づけを重視し、自己流の書き方が蔓延していく危険性を防止するか、検討を要する今後の課題である。

2-4 指導方法の問題点

中学校の書写の授業では、「書写＝書き写す」という呼び方も示しているように、手本に忠実に、綺麗に整った文字が奨励される場合が多い。従って、滲んだり、かすれたりする字は好まれない。元気よくはみ出るような字は言語道断と言われてしまう。最近では、小学校の頃、氏名の手本としてパソコンの毛筆活字を印刷して与えられ、中学校に進学しても、それを見ながら書いている生徒もいる。そのためかどうか分からないが、生徒同士は互いの作品を褒める際、しばしば「すごい、活字みたい。」という表現を用いる。こちらからすると無味乾燥な字と言われているような気がしてならず、「活字」などと言われて嬉しいのか、と疑問に感じてしまうのだが、彼らにとっては「手本のように」と言われるよりも格が上の最上級の褒め言葉のようである。伸び伸び書く喜びが奪われ、固定化した文字へと矯正されてきた証である。本来、前出の九成宮醴泉銘と孔子廟堂碑の比較（点線○、→部分）からも分かるように、同じ文字でも古典により特徴が異なり、筆遣いも自ずと違ってくる。こうした違いは正否を決めるべきものではない。直線的できりっとした字が書きたい場合は九成宮醴泉銘を学び、ふっくらとした優しい字が書きたい場合は孔子廟堂碑を学ぶ、というように、自分の目標とする字に応じて臨書する古典を変え、筆法の違いを書き分けるものである。しかし、小中学校での教育段階で、そうした様々な書風に目を向ける意識は摘み取られ、活字のような固定化した字形のみを良しとする観念を植え付けられてしまう場合が多い。これでは、書写が窮屈で苦手な教科と位置づけられても仕方がないといえるだろう。

高等学校の書道になると指導の内容は一変する。「古典」と言われる名品を与えられ、臨書するように指導される。最初に取り組む楷書も、九成宮醴泉銘の背勢、孔子廟堂碑の向勢、高貞碑の力強さ、雁塔聖教序ののびやかさ、顔真卿の重厚さ等、求められる特徴は様々である。楷書一つでもさまざまな特徴や書き方があり、正解は一つではない、ということも改めて教えられるわけであるが、小中学校時代、熱心に取り組んだ生徒ほどそうした状況に対応できない。活字のように綺麗に並んだ文字だけを理想とする凝り固まった考えから抜け出せず、何を臨書しても自己流の字となってしまう。それまで書写経験のない生徒のほうが、むしろ柔軟に対応できる場合が多いのである。

大学の書道Ⅱ（漢字）の授業でのアンケートでも、半分以上の学生が「小中学校の書写の授業は、決められた字を書いているだけで面白くなかった。」「形以外、何を注意すればよいのか分からなかった。」と答えている。こうした経験の学生達が教員になれば、書写はつまらない教科との観念から、生徒への教育にも積極的になれないにちがいない。従って書道Ⅱの授業では、こうした「つまらない」「型にはめられる」教育を改善する対策として、できるだけ自分達で文字を選ぶようにし、書くことの楽しさを味わうことを目標に授業を行った。次の章では、その学習方法を報告する。

3 実践報告

書写嫌いを減らし、書道への移行をスムーズに行い、意欲をもって取り組ませる方法の一つとしてアクティブラーニングを取り入れた学習を行った。

【課題】

グループごとに、行書の古典（蘭亭序、温泉銘、風信帖など）の中から一つ選び、二文字集字して作品を作りなさい。ただし、できるだけ見栄えのする作品となることを念頭に文字を選ぶこと。

注：筆遣いの学習を目的とする場合は「様々な筆法が使われている文字を選ぶ」といった課題も有効である。見せ場を優先させるか、筆法の練習を優先させるかによって、選字も変わってくるはずである。今回は作品鑑賞についての学習も取り入れたため、見せ場を重視して選字させた。

【各グループの選字】

以下の(1)(2)が、学生(書道Ⅱ選択者)のグループごとの選字とその文字に決めた(決めなかった)理由である。

(1) 最終的に選んだ熟語

- ㊦風神……伸ばす線があると見せ場になると考えたから。
- ㊧初春……まとまった感じのする一文字目と、払いがあって広がりを感じさせる二文字目とでメリハリが出ると考えたから。
- ㊨山嶺……画数の少ない一文字目と、画数の多い二文字目とで作品に強弱をつけられると考えたから。

(2) 候補に挙げたものの選ばなかった熟語

- ㊩暮春……両文字とも左右対称であり、「日」と左右の払いも共通し、単調になると考えたから。
- ㊪清流……上下にサンズイが並ぶため違いを出すべきかどうか迷ったから。「清」の字のバランスをとるのが難しかったから。
- ㊫叙情……どちらも偏と旁からなる文字であるので、左右に分断されてしまうように感じたから。
- ㊬古今……二文字とも画数が少ないため、見栄えがしないと感じたから。

勿論、㊩～㊬を選字したからといって不可というわけではない。しかし、学生の掲げた理由は、

- ・画数の少ない字は見せ場を作るのが難しい。
- ・左右対称の文字はバランスを崩しやすい。
- ・偏と旁に分かれる字の連続は、まとまりを欠きやすい。
- ・同じ文字や同じ部首の連続は微妙に変化をつける必要があり(変化をつけすぎてわざとらしさが出るのは不可)高度な技術を必要とする。
- ・「月」や「月を含む字」字はバランスを崩しやすい。(「月」の書きぶりを見ると技量が分かる。)

といった、作品制作の基本に通じるものであり、妥当な判断といえる。(一定の実力以上の人の場合、その難しさを生かしてあえて選字する場合もある。)

作品制作の場では、選字の段階で已に半分は勝負がついている、と言われる。見せ場のある字を選べるかどうか、というのも技量の一つということである。身近な例を挙げると、中高生の文化祭の展示などの場合、よく書ける生徒ほど書きやすく見栄えのする字を選び、書けない人ほどバランスをとりにくく見せ場も作りづらい文字を選択する傾向がある。その結果、得意な生徒の作品は仕上がりも早く、展示された際にもより上手に見える。一方、苦手な生徒の作品は仕上がるにも時間がかかり、人一倍努力をしても相応の見栄えがしな

い。本人も作品を見比べて劣等感を覚え苦手意識を一層強くする、という悪循環に陥りやすい。

【学生の作品】



今回の文字選定に関する意見も、個人では気づきにくい指摘もあろうが、能動的に意見を出し合うことで、指導者が説明しなくても自分たちの力で気づくことが可能となり、達成感に繋がっている。また、それを互いに発表させることで、自分たちのグループでは指摘しなかった点も確認することができた。これは、アクティブラーニングの大きな成果であるといえよう。

4 おわりに

パソコンが普及し、手書きの文字が少なくなっている現在、伝統文化の継承という点においても書写・書道は極めて重要である。にもかかわらず、主要科目の時間数確保という理由から軽視され、規定通りの時間が割り当てられていない場合も多い。指導者不足のため、芸術選択の中に加えられていない学校も少なからず存在する。

また、国語教育と書道教育の連携も大きな課題を含んでいる。筆順は国語にとって大きな問題であり、文字を丁寧に書く、正しい字形を覚える、という観点からも避けられない指導である。しかしそうした字形・筆順重視の教育が、文字を書くことへの苦手意識へと発展し、書道において重要な芸術教科としての個性や創造性が失われがちになっている。つまり、書写から書道への接続が上手くなされていない、というのが現実である。

学校間の円滑な連携を図るためには、一人の教員が国語と書道を兼任する可能性の高い現状を生かし、双方の立場を考慮した上でこの問題に取り組む必要がある。書の文化の継承と創造のできる人間の育成をめざして、アクティブラーニングの導入等、能動的な取り組みを通じて意欲を高め、鑑賞する楽しさを味わう機会を増やしていくカリキュラムの作成が必要である。

【注記】

- (1) 『中学書写』 教育出版 (2014) pp.10-11 「風車」より転載。
- (2) 『中学生の書写』 三省堂(2011) p.36 「風の音を聞く」より転載。

【引用文献】

- 中央教育審議会、2008年4月18日、教育振興基本計画について—「教育立国」の実現に向けて— (答申)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/08042205/004.htm
2016年12月10日取得
- 文部科学省、2010年1月29日、高等学校学習指導要領解説
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1282000.htm
2016年12月10日取得
- 文部省初等中等教育局初等教育課編 (1958) 『筆順指導の手びき』 博文堂出版